

# コーヒーを通して見たフェアトレード スリランカ山岳地帯に行く

清田和之著 (書肆侃侃房・1575円)

## 「正当な代価」を支払う苦勞



評・佐藤忠男

(映画評論家)

福岡の出版社から出た本である。著者は熊本で地産地消の食にこだわる幼稚園と、有機無農薬専門のコーヒー販売店を営んでいる人で、自分の思想を大切に行っている経営者と言えるだろう。

コーヒーの豆を輸入するのにも、ただ儲かりさえすればいいとは思わない。貧しい国の生産者から不当に安い価格で買うのではなく、彼らの労働にふさわしい公正な金額を払いたい。これがフェアトレードである。しかしそれがじつはけっこう手間のかかる仕事になるのだ。ただ正当だと思いう額を払おうとしても既成のシステムの中では中間搾取されてしまう。生産者に直接支払いたい。そのためには直接取引できる生産者を見つけて育てなければならぬ。

著者は紅茶の生産地として有名なスリランカが、じつは昔はコーヒーの生産地だったことを知る。そこでこの国に

旅を重ねてまだ残っている産地を探し、将来有望だと思いが、国際的なコーヒー貿易からは長い間外れていたため、商品として認められるものにするためにはいろいろ注文をつけたり指導したりもしなければならぬ。その苦勞と努力がこの本にはくわしく書いてある。時間もお金もかかった。そんな苦勞をしてまで「正当な代価」を払いたいのにはなぜか。貧しい国の産業を助けたいからである。素晴らしい理想主義である。だからこの本は、苦勞話なのにじつに生き生きとした発見の喜びにあふれている。

たんなる観光地としてはなく、人情あつこの国の人々を見直す。そして書く。この国のコーヒー豆の独特な性質について。それをどう活かそうかという工夫について。そしてそれをスリランカの高地の田舎の貧しい素朴な人々に説得し、共感を得て教え、共に理想を持って進んでゆくことの喜びについて。

さいわい日本のJICA(独立行政法人国際協力機構)には「草の根技術協力事業」という制度があつて、途上国の発展のための市民参加の仕事の助けをくれる。これを活用して計画を具体化してゆくのだが、読みながらぜひ成功してほしいと思う。